

空



2017・1

SORA 70号

月光

柴田 佐知子

裏口の幅に秋風来りけり

馬追の頭を固く現はるる

泣ざやまぬ赤子が熱し葉鶏頭

たつぷりと眠りし顔や種を採る

大足の踏み入つてゆく茸山

芋煮会焦げたる石をまた使ふ

秋刀魚焼く遺産争議に揺るる家

落穂田に潮風通る鐘の音も

柩に蘭入るる生者は漂ひて

突き入りし竹刀の先に鹿の皮

退り見て菊人形の裾正す

三日ほど経てば隙なき菊人形

菊人形夜は武者の声姫のこゑ

秘されたる仏の裏に猿酒

月光の道満月の森に入る

国滅ぶときも空あり月光も

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

竜淵に潜みて水の満ちにけり

空よりも蒼きモスクや枯木立

良夜かな夢の続きに母の下駄

見渡してご神体なき寒さかな

虫の音聞く己が鼓動を聞くやうに

コーランのこだま寒波の来たりけり

村で守る小さき社新豆腐

冴え冴えと省くものなきモスクかな

別れ来て鏡に向かふ秋の夜

着膨れて祈りの長き蹠かな

金輪際曲がらぬ形唐辛子

小熊手を持ちて一葉記念館

魯田の雨を吸ひたる匂ひかな

食堂の見本疑ふ懐手

蛇穴に入りて緊まりし山の色

銅像の眼鏡が可笑し返り花

長崎 荒井千佐代

千葉 服部早苗

をそろしき潮位なりけり風の葛

雨乞や龍担ぎつつ水飲みつつ

ひとところ潮目の交じる野分晴

実がちなる朝顔のあぐ終の花

分校より唱歌もれ来る崩れ築

日日の飲食大事瀬祭忌

團欒の中心に猫あきざくら

芋坂は鉄路に断たれ鰯雲

秋簾よりベルデイーのレクイエム

子規の忌や羽二重団子駅に買ひ

癩癩も生あればこそ秋桜

落款のごと新宿の曼珠沙華

冬やラッパ一万の怒りを胸に溜め

清秋や素手にておはす観世音

鰯雲未来見えなきこと楽し

枯蓮のまだ枯れきらぬけもの臭

福岡 柴田志津子

鬼女の面とれば青年上り月

縁側のおとぎ話に小鳥来る

うやむやに終る言ひ訳秋暑し

玄海のおとなしき日や霧る

子の帽子かむりしままに捨案山子

人の名をすぐに忘れて枇杷の花

大根提げ片手拝みに地藏尊

遊び場の天神さまに掛大根

福岡 岸 洋子

休み田の土は頑固よ曼珠沙華

耳が夜に馴染んできたりつづれさせ

吹きおろす秋風鯉を白くせり

姿見の前をくるくる七五三

草の花姉妹の歌のすぐ揃ふ

膝行し見上ぐる佛昼の虫

松手入れ脚立に括る昼のもの

片方を崖に突き刺し稲架を組む

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

山畑や鷹の渡りし余り風

虫送り夕べきれいな風わたり

魯田のうつせ穂揺るる日暮かな

少年のやうに台風過ぎにけり

蕎麦の花この道行かば村を出る

風音は水辺を走り秋の蛇

迷ひをればこの世出さうな花野かな

子規の忌の過ぎし草木のそよぎかな

馬肥ゆる広々わたる牧の風

てのひらにこの童顔の栗の虫

馬小屋にかすかな寢息星月夜

きちきちの音に晴れきし淡路島

牛の仔の甘え鳴きして夜の長き

水草を秋の金魚に足しにけり

天の川外輪山を跨ぎたる

本棚の板のたわみや鳥渡る

太宰府 山本 則男

朝市の町より燕帰りけり
おほぞらに道のありけり鶴来る
草市や死者の喜ぶものばかり
もつると言ふことのなき鷹柱
大阿蘇の帰燕の空に火山灰混じる

熊本 松田 明子

一对の鶴に大空あけ渡す
暮るるまで空を自在に万の鶴
冬晴やけふに始まる鶴日誌
活断層の真っ只中へ穴惑ひ
菊花展名札に齡書き添へて

粕屋 秋 千晴

城内の木々に番号秋澄めり
帰り花午後の日差しの頬に來し
羽根広げ孔雀動かぬ文化の日
七五三神殿の椅子高かりし
抱かれたる子が黄落へ手を伸ばす

岡垣 田中とし江

川底を渡る轍や豊の秋
鎌置いて立てば蜻蛉の群の中
返り花白緒の草履土間に干し
つながれし猫の鳴き声石路の花
身にしむや神鼓の響き一途なり

粕屋 吉田 穂

新松子神の系図の末広がり
色変へぬ松や騎馬像空を翔ぶ
島山を神と仰ぎて棟の実
総代の背広似合はず里神楽
袈裟がけに劔立山紅葉す

福岡 永淵 恵子

東西に大灘ふたつ鷹渡る
対州は石積み島の島鱈雲
海神は山のとっぺん鹿の声
抱きあげて神鈴ならす七五三
漁火のみつよつ釣瓶落しかな

東京 山田 正子

子規の庭まづ鶏頭を数へけり
霧の中瞑想も又祈りなり
秋祭よそ者少し遠くより
浅草の蕎麦屋相席片しぐれ
夕陽射し柿はますます柿色に

宮崎 田代 民子

馬借りに始まる秋の祭かな
どの馬も駿馬に遠き祭馬
馬上に背正す権祢宜秋高し
秋の名残りしやんしやん馬の鈴の音も
峙さがし島の飛び交ふ冬隣

糸島 小林 朱 夏

草紅葉影が先行く帰り道
新藁に凭れ後悔してゐたり
誓文払ひ浮かれて入るぜんざい屋
毛糸編む幾度も丈を確かめて
薪割つて縁の下まで積んでいく

袖岡 山 内 碧

鬼瓦に止まるいつもの寒鴉
林檎齧る女優の唇を真似て
鶏頭を触ればやはり武骨なり
菊作の父針金を曲げてをり
願掛けの蝋燭あまた冬に入る

千葉 原 友 子

かなかなや知足の鉢に水満たし
月祀る卓袱台一つ歳を取り
放屁虫掃き出してより土間匂ふ
日の畑に夫見え葭戸蔵ひけり
杜よりも遠嶺が親し柿吊す

長崎 松尾 龍之介

長き夜や開けてまぼしき冷蔵庫
十三夜引き潮までを漲れる
一瞬にして雁の列ばらけたり
去来忌や矢竹の残る武家屋敷
落葉しぐれ関西弁に降りかかる

福岡 矢野百合子

東京 今井春生

秋日燦波頭はお湯の湧く如し

枯蟪蛄翅破れても斧上ぐる

ふるさとの嶺々より続く鱚雲

石積むは祈りの形水澄めり

鶏に声かけらるる豊の秋

朝空に薄き半月白菜干す

まつさらな空を給はる文化の日

パラフィン紙透かし見るよな今朝の冬

微笑みも見舞ひの一つ草の花

枯蓮を積みたる舟を風が押す

糸田 宮井知英

兵庫 岩井京子

行く秋や川向かうより鶏の声

転倒の震へに犬の来てくれる

頑なに守る山畑木の実降る

病む床の手櫛にかくも木の葉髪

小六月川を隔てて町と村

空澄みて雲の変相またたく間

初時雨川鶏は森に籠りたる

小鳥来るほかは退屈アンテナは

主ぬしままの窓辺や枇杷の花

日にち葉ただひたすらに秋の雲

福岡 あさなが捷

稜線をあらはに月の昇りたる

草紅葉やつとごめんなさいを言ふ

塩田の空は大きく島の秋

成りゆきのままよ葛湯を吹いてをり

初芝居足踏み出して睨みけり

大阪 田岡 千章

葉鶏頭犬に鎖の重すぎる

遮断機の癩な警報雁来紅

糸のこ草南都七寺の隅を占む

口紅は化粧の仕上げ小鳥来る

蓮実飛ぶをとこ誉めるに「あほやなあ」

福岡 栗原 京子

鯉の餌を遠くへ放る秋日和

くすぐりて子を笑はする小春かな

割れ貝をまた踏む渚夕月夜

川音の誘ふ闇ある良夜かな

駅前ネオンが疇寒雀

須恵 苑 実 耶

菊日和無言でくぐる鳥居かな

横笛に始まる雅楽秋高し

秋澄むや忘るることもまた楽し

終点にバス待機せる月の夜

枕辺の深夜放送涼新た

京都 天谷翔子

新涼やボルゾイの四肢しなやかに

鳳仙花はちけて島の武家屋敷

毬栗を蹴つて思春期真只中

銀杏を踏んで横丁の立呑屋

代役は馬の脚なり村芝居

福岡 田代貞香

黄落や茶室につゞく長屋門

ひとり居の急がぬ家路秋の声

鳳仙花ひとり住まひの独り言

みどり児をこはごは抱く秋日和

貼薬いっ気に剥す夜寒かな

北九州 横田敬子

石露咲くや幼稚園にも外厠

冷まじや首なし地蔵の赤い布

家紋ある塀のみ残り枇杷の花

殉職の碑に鶴嘴や返り花

冬桜もと料亭のケアハウス

山梨 野畑さゆり

水澄むや大河三本甲斐の国

魯田を踏みて甲斐駒ヶ岳仰ぎけり

白萩の香に包まれし忌日かな

野紺菊供ふ遠忌のちちははへ

赤とんぼ湧きくるごとし分教場